

職にも久米之助の下山を請う手紙を書きました。ところが、久米之助宛、住職宛の手紙を入れ違えてしまい、住職のもとに久米之助への恋文が届いてしまったのです。住職の怒りを買った久米之助は破門となり、山から追われてお梅の家へと急ぎました。結婚の儀はもう明日という状況で、久米之助とお梅は再会を果たします。しかし、久米之助の騒動を知った婚約者もすぐさま後を追ってきました。夜の闇の中を逃げ出した二人は、行くあてもなく、高野山の女人堂に身を潜めます。夜が明けける前に、と二人は心中の覚悟を決め、久米之助は脇差でお梅の胸を刺し、つづいて自分の喉を貫いたということです。

物語の途中、久米之助は殺してしまった友人の兄に斬り付けられそうになったり、女人堂の中で、父の遺骨をもった姉と偶然再会したりと、悲劇をさらに盛り上げるような場面が連続します。「若き女」は、《お梅 条之助》の浮世絵を眺めながら、二人の運命に思いを馳せていたのでしょうか。感傷に浸りながら、ため息一つ…そんな場面ではないかと想像できます。心中もの、という古臭いイメージがありますが、「大正口マン」と呼ばれ、夢見がちで退廃的なムードを好んだ当時の空気には合っていたのでしょうか。こうした叶わぬ恋愛に走り落ちていく女の姿は、大正時代の美人画では非常にポピュラーな画題でした。

さて、《お梅 条之助》の浮世絵の下には、てぬぐいを噛んでいる朱の着物の女を描いた浮世絵があります。これも《美艷色乃美名家見》のうち一枚で、《曾我五郎時宗 希王い坂 少々》だとわかります。二人は『曾我物語』の登場人物で、この『曾我物語』を題材とした『寿曾我対面』などの演目は、江戸の歌舞伎で大変な人気だったようです。化粧坂の「少 将」は引く手あまたの遊女で、父の仇討ちに燃える曾我五郎と恋に落ちますが、五郎が仇討ちに成功した後には処刑されたこと知り、悲

しみのあまり16歳の若さで出家しました。

《希王い坂少々》の上には、黒緋の袖で口元を隠した女の首絵があります。《名所腰掛八景》のうちの《団扇》で、これまた歌麿の浮世絵です。「腰掛」とは、露地や寺社の境内で湯茶を提供する茶屋のことで、有名どころの看板娘はこのような浮世絵に描かれて、たいへんな人気者になったそうです。実は下半分に、右手にもったうちわが描かれているのですが、《若き女》の画中ではこの部分が切れてしまっています。幾春はこれをあえて省略したのでしょうか。美人のうちわのとりあわせで、寛政美人と大正美人を対照させ、お互いをひきたてようというのが元々のねらいだったのかもしれませんが。しかし実際このとおりに描いてしまうと明け透けで野暮ったいので、片方のうちわを隠し、「知っている人にはわかる」ような見せ方にしたのかもしれませんが。

《お梅》と《希王い坂少々》の下には、日傘をさしてたたずむ女の後姿が描かれた浮世絵があります。ちょうど2枚の隙間から、土蔵の白壁がつかっている様子が見えるでしょうか。こちらは歌川広重の《名所江戸百景 鎧の渡し小網町》です。《名所江戸百景》は、四季折々の江戸の風景を描いた120点の揃物で、斬新な構図が高く評価される浮世絵風景版画の傑作として知られています。《鎧の渡し小網町》は、現在の東京証券取引所付近から見た風景で、日本橋川に鎧橋がかかるまでは舟渡しがあった場所です。日傘の女性は藍色地に藤模様の着物に朱の帯を絞めた夏らしい装いで、つばめが飛び交う様子もさわやかな初夏の陽気を感じさせます。幾春がこの浮世絵を選んだ理由の一つは、こうした季節感だったのかもしれませんが。

画面の奥には、1枚の手紙と2枚の浮世絵が置いてあります。手紙の内容とその下の浮世絵の絵柄は判別できませんが、さらにその下の浮世絵は、題に「百人美女」とあるのが読み、三代歌川豊国の《江戸名所百人美女》であることが



渡辺幾春《女》1923(大正12)年 名古屋市美術館蔵



三代歌川豊国《江戸名所百人美女 花川戸》



渡辺幾春

わかります。さらに、コマ絵に描かれた松と、題の下に見える金太郎のお面から、そのうちの《白髭明神》であると特定できます。この絵を選んだのにも、何か理由があったのでしょうか。

作者の渡辺幾春は、俄かに浮世絵を引用したわけではなく、その描写にかなりのこだわりを持っていたことが想像できます。もともと浮世絵の愛好家だったようで、三代歌川豊国の《歳暮の深雪》や歌川広重の《名所江戸百景 玉川堤の花》など、それなりの数の浮世絵を所有していたことがわかっています。ただし、《若き女》に描き込んだ浮世絵を実際に

持っていたかどうかはわかりません。

明治30年代から昭和10年代まで非常に人気があった美人画ですが、そのルーツは、遊女や町娘を描いて庶民の欲求に応えた浮世絵にありました。江戸浮世絵の系譜をひく鍋木清方はもちろん、京都画壇の上村松園なども、鳥居清長や喜多川歌麿の描く「美人絵」のポーズや構図を意図的に引用している作例がたくさん残っています。たとえば女が化粧をする、蛸を見る、傘をさすといったシチュエーションは、浮世絵の定番で、渡辺幾春も《女》などでその伝統を踏襲しています。《女》は、三代豊国の《江戸名所百人美女 花川戸》などに見られる、「鏡台の前で身なりを整える女」をベースに、立体的な人体表現、現代風の着物で仕上げた作品で、顔には画家仲間の間でも美人で有名だったという幾春の妻の容貌が描かれています。このように、浮世絵に写実性や個性を加味することによって品を高めていくというのが、明治・大正期の美人画のひとつの在り方でした。幾春の《若き女》は、優れた美人画を描く条件、すなわち作者が浮世絵についての確かな知識を持っていることをアピールしている作品なのかもしれません。(nori)

展覧会の舞台裏

作品の運搬と展示⑫ 柵を置く

作品の展示が終わり、照明も完了、キャプションや解説パネルなども適宜配置し、通常ならばあとはお客さんを待つばかりという状態ですが、展覧会によってはこの後柵の設置を行うことがあります。作品の手前1メートルのあたりに、鑑賞者が必要以上に作品に接近して触れたりしないように、作品保護を目的に柵を置きます。デザインも材質も高さもまちまちですが、日本の美術館で自前の柵を所有していないところはほとんどないでしょう。当館にも開館以来使用している高さ30センチほどの、金属製の柵があります。開館当初はこの柵が活躍する機会が多く、常設展でも特別展でも頻りに展示室の中に設置しました。しかし、年を経るごとに次第にこの柵を使用する機会は減っていき、最近ではごく稀にしか設置することはありません。一つには開館以来20数年を経て、来館者の鑑賞マナーも成熟し、かつてほど作品の状態保全に神経質にならなくてもよい、という環境の変化があります。もう一つは、作品の保全と鑑賞条件のどちらを優先するかという美術館側の判断があります。よほど巨大な作品でもない限り、柵があることが鑑賞の妨げになるということは実際にはありませんが、それでも「近づいてはいけない」と警告を発しているわけですから、作品との心理的な距離は遠くなり

ます。すなわちフレンドリーではない。せつかく美術館へやってきて、作品を楽しもうとしているところへ、「近づくな」ですから、気分がよいはずがありません。作品の保全は確かに大切だが、お客様に楽しく鑑賞していただくことはもっと大切。美術館はお客様を信頼していますので、どうぞじっくりとご鑑賞ください、というメッセージの意味も込めて、最近では柵の設置を控えています。

しかし、これも特別展となると事情がいささか違ってきます。展示しているのはほとんどの場合、自分のコレクションではなく、他の美術館や個人所蔵家から借用した大切な預かり物。いきおい安全性には細心の注意を払うことが求められ、無粋な柵の設置もやむを得ずとの判断にいたることも少なくありません。そもそも海外の美術館からの借用の場合は、事前に契約書を交わすことが多いのですが、貸し出しの条件として柵の設置が義務付けられることがほとんどです。それでもなお、海外の美術館巡りをされた方は疑問に思われるかもしれません。海外の展覧会で柵を設置しているのはほとんど見たことがないぞ、と。確かにそうです。これをどう考えるのか。見方は色々ですが、つまるところは歴史が浅いという点に行き着くでしょうか。日本で今のように盛んに展覧会が開かれるようになって、まだ半世紀にもなりません。美術館も鑑賞者も、更なる経験と努力を積み重ねて、文化としての美術への理解を深めた時、欧米の美術館やコレクターからの信頼を勝ち得るとともに、作品と鑑賞者の間に横たわる柵も、きっと取り払われることでしょう。(F)

感想ノートから

ベン・シャーン
クロスメディア・アーティスト
—写真、絵画、グラフィック・アート—

2012年2月11日(土・祝)～3月25日(日)

我が国で20年ぶりとなる「ベン・シャーン」展を実施するに当たって、今開催する意味は何かと、巡回館の担当学芸員と幾度か話をしました。シャーンが表現しているものは、今日の状況に照らして、私たちにあらためて必要とされているものではないか。この問いと答を、昨年3月11日の東日本大震災は、折あるごとに再検討するよう私たちに求めています。この原稿の入稿と前後して、最終会場の福島県立美術館での展覧会がはじまります。それを受けての問い直しもあるでしょう。名古屋市美術館でご覧いただいたみなさまの感想にも、東日本大震災と関わるものが少なからずありました。

遠くは九州という他府県の遠方からのお客さまの書き込みが多いのも特徴です。古くから愛好する方とともに実作を初めて目にする方の「本物の作品に触れたい」という強い思いが伝わってくるものでした。また、期待にたがわぬ感動を得たことが率直につづられてもいます。

一方、社会問題を扱った初期の作品は、主題となった事件や時代背景が分からないと良く理解できない、そのためもっと解説を増やすべきだというご意見もありました。展示にどこまで解説を付けるかは、多くの展覧会で頭を悩ませる問題です。この展覧会では、作品と向き合い、作品そのものが持つ魅力に触れていただくことを優先しました。分からないことが気になって集中できないというご意見もありますが、文字を読むのに力と時間を注いでしまい、作品を味わうのがおろそかななるのは、もったいなくはないでしょうか。

海外からの借用作品が福島に巡回しないことへの批判もありました。先方の無理解という誤解があるようですが、そのようなことはありません。彼らは日本の被災状況に心を痛め、私たちが予定通りに展覧会を開催するために乗り越えなければならない状況にも理解を示してくれました。美術作品の貸借は、国際的な基準にしたがって行われています。貸借の結論を出さなければならなかったとき、福島第一原子力発電所は予断を許さぬ状況でした。立場が逆なら、私たちも同様の対応をすることでしょう。

この度の展覧会で、シャーンの優れた作品が国内に多数所蔵されていることが明らかになりました。当館所蔵の作品も含めて、これからも折あるごとにご覧いただきたいと思えます。(み。)

展覧会 現在進行形

豊田市美術館・名古屋市美術館連携企画
「青木野枝 | ふりそぐものたち」展

2012年10月20日(土)～12月16日(日)

青木野枝(1958—)は今日の日本を代表する彫刻家です。デジタル機器や樹脂素材が普及し、今日の美術表現は以前からの絵画や彫刻とはずいぶん違うものになっています。青木は、鉄板を溶断し、切り出したパーツを溶

接して、生命の源である水の循環を主題とする作品を作りつけています。人体を主題とし、鑄造によって作られるブロンズ作品と比べれば、金属を素材とする彫刻のなかでも青木の主題と手法は現代的と言えます。しかし、造形をめぐる概念と価値観が変容拡大している今日では、保守的な側面を持つとも言えます。「彫刻家になりたいと思っている」という青木には、おのれの立ち位置とともに自分が生み出すものの位置取りが見えているのです。

青木は越後妻有や瀬戸内の国際美術展に参加しています。設置場所に親和した軽やかで

心地よいリズムを持つ運動感にあふれる作品に接し、魅了された方も多いのではないのでしょうか。豊田市美術館と連携し、同時期にひとつの展覧会を2つの会場で実施するこの度の「青木野枝展」は、今日にいたる青木の創作世界をこれまでになく規模と内容でご紹介します。名古屋市美術館が近隣の美術館と連携し、ひとつの展覧会を2つの会場で実施するのは、1995年に愛知県美術館で開催した「環流—日韓現代美術展」以来のこととなります。今回も、より多くの方に青木を知っていただく機会とするだけでなく、それぞれの館の利用者の交流を促し、地域振興にも役立つこと

ができればと考えています。

青木は、来年度に開催される「あいちトリエンナーレ2013」にも第一陣の参加作家として名を連ねました。このことから注目度の高い作家であることがお分かりいただけるでしょう。それなりの広さのある公立美術館の特別展展示室2つを同時に満たせる作家はそれほど多くありません。青木野枝の力量が可能にする展覧会です。本展のための新作も2館ともにあります。ご期待ください。(み。)

豊田市美術館会期：

2012年10月13日(土)～12月24日(月・祝)

郷土の作家たち

大澤 海蔵(おおさわ かいぞう/1906-71)

大澤海蔵は、1906年11月1日に名古屋市東区白壁町に生まれ、17歳の頃に、鬼頭鍋三郎、松下春雄、中野安治郎らが結成したばかりの美術研究グループ・サンサシオンの第1回展の会場を訪れ、初めて見る洋画の展覧会に感動して、画家を志すようになった。

翌1924年には上京して、新宿区下落合において松下春雄や詩人の春山行夫らと共同生活を送りながら、川端画学校に通い、光風会の画家・辻永に師事して、本格的に洋画を学びはじめた。

1925年には、第3回サンサシオン展と第12回光風会展にそれぞれ初入選して、画壇へのデビューを果たした。これ以降、サンサシオンにおいては、1926年の第4回展で会友に、1928年の第5回展では会員に推挙され、主要なメンバーとなっていった。また、1928年の第9回帝展に《庭》が初入選するとともに、第15回光風会展では光風会賞を受賞した。

陽光の溢れる緑濃い庭で寛ぐ女性像や西洋風の道具や食器が並んだ部屋で暮らす家族像など、近代的な都市生活の情景を堅実な画面

構成で描くサンサシオンの典型的な画風を代表する画家として、帝展や光風会展においても活躍して、1933年には名古屋で初めての個展を開催した。

サンサシオン解散後の1934年には光風会の会員となり、林きよと結婚して、東京の中野区江古田にアトリエを新築した。

この頃から次第に色調が明るくなり、1938年の第2回新文展では、師匠譲りの主題である羊たちが群れる《草はら》を描いた作品で特選を受賞した。

戦後も、日展と光風会展に一貫して出品を続けて、1950年頃から楽器や花瓶などをテーブルに並べた「卓上静物」のシリーズを継続的に探究して、1961年の第4回日展では《ホルンのある静物》によって、文部大臣賞を受賞した。

その後も日展会員・評議員、光風会理事として活動したが、1971年11月5日に逝去。翌1972年の第4回日展と第58回光風会展に遺作が出品された。(sy)



大澤海蔵《厨房》1934年頃

どこがおもしろい?!

今回取り上げる作品は、福岡道雄(1936-)の《琵琶湖の風》(1982年)です。2011年度名品コレクション展Ⅰ後期(6/28~9/4)の期間中に常設展をご覧になった皆さんから寄せられたコメントをご紹介します。

「ただのくろいはこだとおもったけど、上から見るとほこぼこしてて、海のなみのようでした。」(ひなたさん、8歳)

「なぜ四角なんだ?!と思いました。まさかびわこの色?とは…。そもそもなんでこんな作品が?というふしぎがうかんで、そこがおもしろいです。」(筒井さん、12歳)

「広い琵琶湖の静かにゆれる波をまるで一つの型に入れて固めたようなものがおもしろかったです。また一面しかほっていないということもとてもおもしろかったです。」(無名様々さん、祝10000歳)

「この作品を見たら、自分の思いのまま作っているように見えました。作品はずごいなあと思いました。最初は大理石かと思いました。」(ぼわーおぐちよぐちよ鳴くトリトンさん、12歳)

「琵琶湖の底知れない感じがでています。箱の中には何が入っているのでしょうか。」(けんたろうさん、14歳)

「ついフラフラと座りそうになる質感と、ながめ直した時の存在感に2度ビックリさせられました。座っちゃダメなんだろうとは思っていますが、あの“水面”をビチャビチャとたたいてみたい気がします。あと、本物の琵琶湖を見たくまりました。」(POKAさん、年齢未記入)

「湖面に静かな風が吹き、遠くで鳥がさえずり、葉が揺れてカサカサ気持のいい音が聞こえるよう…。想像力がムクムクとわきあがるような作品ですね。」(H.Sさん、44歳)

「近くのいすに座ってほんやりながめていると、十年前に琵琶湖近くに住んでいた頃を思い出し、とてもなつかしく感じられた。私には、この作品がおだやかに晴れた夕暮れの中の静かな湖面の一片に思えたが、他の方にはどの様に見えていたのか、とても気になりながら作品を後にしました。」(ちこたんさん、30代半ば)

「波を物質として見ていること。湖の水を切り取ってそのまま展示空間に表現したところ(がおもしろい)です。湖の水を展示空間に持ち込むとすれば、まずどんな小さな波でも立

たないし、固体ではないので、普段私たちが湖の前で目にしているような形では表現できません。液体なので展示室のマットにしみこんでしまいます。この作品を見ると、湖の中に立っている感覚になり、その後自分の足がしっかりと地についていることがわかります。地球の壮大さを感じました。」(みかささん、25歳)

福岡道雄は1950年代後半から独自に作品を発表し続けている彫刻家です。1970年代から制作している黒い箱状の作品は、天板部分に広がる光景から風景彫刻と呼ばれていますが、「以前は作品の中によく自分自身が登場していたのであるが、それは自分と自然とのかわりというようなものではなく、“今日はいい天気で気持ちがよく、朝から車を洗ってやりました”という程度のこと」(「箱を作る」福岡道雄「何もすることがない」1990年)と評論家からの指摘を受けて風景を意識するようになったようです。制作を重ねるにつれ、風景の一部のみをクローズアップしたような作品へと変化しますが「ただ単に、“箱”そのものを作っている方が僕にはよくわかるような気がするし、そのほうがずっとスバラシイと思える」(前掲文)、つまり見る者の大半が関心を持つであろう天板に表現された何かより箱そのものの方が重要だと語っています。何だか狐につままれたような気分になりますが、一方で「波の情景を作り始めて、もう何年にもなる。油粘土で、その原型を作るので。体を波にゆだねると手がひとりでに波を作る」(「波を作る」前掲書)とも話し、感覚が体に染み込むまで対象を観察し続けるという、凡人の想像に余りある集中力を見せる側面もあります。どうやら作家の興味は作るという行為にあり、自分の主義主張や思想を示すために行うのではなく、何気ない日々を積み重ねるうちに淡々と、でも一生懸命に何かを生み出し続けることを理想としていると考えることができそうです。

コメントを書いてくださった皆様、ご協力ありがとうございました。(3)

米山 和子(よねやま よりこ/1958-)

埼玉県に生まれた米山和子は、1983年に東京藝術大学大学院を修了、その後、愛知に拠点を移し、作家活動を行ってきた。近年においては、和紙という素材を見出し、和紙によってかたどられた人体像やティンペアなどを制作しているが、それらは単なる人体や動物の姿というわけではなく、彼女が常々考えている「不在と存在」、「内側と外側」、「境界」についての思索を作品化したものといえる。紙には裏と表があるが、どちらが内側でどちらが外側か、また、人でいえば何処からが内側で何処からが外か、相対するものとの、ものと空間の境目は何処か。作家は、そういったことについて考えながら、物と物、対比するものの境目のぎりぎりのところに働くバランスがものの形を刻一刻と留める様子を、作品によって表現しようとしているという。彼女は植物にも関心を持っている。植物のからだは一種の抜け殻のようなものである。そんな、植物みtainな人間をトルソとして作ろうと考えたという。それは、肉体をもつ人間の「肉」の部分がなくなった、「不在」に近いもの、そして、現実世界から離れたもののように思える。彼女が作る和紙の作品の神秘性には、どこか天上の世界を思わせるものがある。「存在」と「不在」の間は、「現実」と「非現実」の間、

「地」と「天」の間でもあるかもしれない。儚さと強さを併せ持つ和紙による造形の美しさ、神秘性を帯びた清浄な作品世界は、見ている我々を夢と現実の狭間に連れて行ってくれるかのようである。

2011年には、名古屋市美術館で常設企画展「ポジション2011 米山和子展—ほどくかたち、つむぐけしき」が開催され、和紙による人体像を展示室の空間を生かして展示した。そこで彼女は、自然の営みや自然の中にある循環をも表現したいと考え、和紙による月と太陽を壁に配し、そこから和紙の人体像へと自然な流れを作り出した。和紙という伝統的な素材を選びつつ、現代的な表現に達している稀有な作家である。(akko)



「ふざいのそんざい展」2007より PHOTO:MAKOTO YANO

イベントレビュー

田中浜の「場踊り」:
荒川修作へのオマージュ

名古屋市美術館の重要作家・荒川修作が亡くなって、あっという間に2年が過ぎました。

1960年代から文字や記号、幾何学的な図式による絵画によって、人間の知覚や思考に働きかける作品を探究しはじめて、1980年代からは、人間の身体感覚を揺さぶる建築的な作品に取り組んで、世界各地で旺盛な活動を展開していた荒川修作の思いがけない突然の「死」は、私たちに大きな衝撃を与えました。

名古屋市美術館では、これまでに荒川修作の初期から晩年までの各時期の代表作(総計16点)を収蔵するとともに、2005年には、特別展として「荒川修作を解読する」展を開催してきました。

今回は、没後2年を記念して、新たに寄託された作品(5点)を中心に、荒川芸術の出発点となる図式絵画が確立した時代(1960年代)の作品を紹介する常設企画展「荒川修作の“MISTAKE”」を開催しました。

この展覧会のクロージング・イベントとして、世界各地において「場踊り」を展開しているダンサー・田中浜さんによる「荒川修作へのオマージュ」として、荒川修作の作品の前という特別な「場」での「踊り」を実施しました。

この前日、荒川修作の命日(5月19日)に、養老天命反転地において、平坦な地面のまっ

たかない傾斜する大地の上で重力と格闘するように踊った田中浜さんは、名古屋市美術館の会場(常設展示室3および地階ロビー)を見て、「昨日とはまったく違う平面の世界での場踊りを見せましょう」と語っていました。

午後3時、常設展示室3を埋め尽くす観客に囲まれながら、荒川修作の作品《クールベのキャンパス》の前で静かに踊りはじめて、次第に熱気を帯びた激しい動きのなかで、「Mountain」「Air」など、荒川修作の作品に描き込まれた言葉を繰り返して発しました。

その後、地階ロビーに場所を移して、「場踊り」において初めてのことだったようですが、懐かしい男心の歌を唄い、大理石の床を転がり回り、最期は、常設展示室1の入口に展示してある荒川修作の作品《自画像》に向かい合うようにして終わりました。

こうして200名を超える観客の拍手とともに、荒川修作の没後3年目は始まったのでした。

また「場踊り」終了後には、田中浜さんの新しい著書『僕はずっと裸だった—前衛ダンサーの身体論』(工作舎/2011年)などへのサイン会も開かれました。(sy)



イベントガイド

■特別展「大エルミタージュ美術館展—世紀の顔 西欧絵画の400年」

会期: 7月28日(土)~9月30日(日)
料金: 一般1,500円・高大生1,000円
小中生600円

{関連催事} ※①~③2F講堂・無料・先着180名

①記念講演会Ⅰ「北国の美の宮殿:エルミタージュ美術館の名品を見る」

日時: 8月5日(日) 午後2時~
講師: 千足伸行氏(本展監修者・成城大学名誉教授)

②記念講演会Ⅱ「エルミタージュ 女帝の時代」

日時: 9月1日(土) 午後2時~
講師: 中野京子氏(ドイツ文学者・早稲田大学講師)

③展覧会解説

日時: 8月19日(日)・9月16日(日) 午後2時~
講師: 深谷克典(名古屋市美術館学芸課長)

■夏休み こどもの美術館

「線を楽しむ/線で楽しむ」をテーマに線の表現のおもしろさを紹介します。
会期: 7月28日(土)~9月30日(日)

■特別展「青木野枝 | ふりそぐものたち」

豊田市美術館と共通のテーマのもと開催。
会期: (名古屋)10月20日(土)~12月16日(日)

(豊田)10月13日(土)~12月24日(月・祝)

料金: (2会場セット券)一般1,800円・高大生1,300円・小中生無料 ※前売は各300円引

(単館観覧券)一般1,100円・高大生800円・小中生無料 ※前売は各200円引

■コレクション解析学

所蔵作品の魅力や学芸員が紹介します。
日時: 9月9日(日) 午後2時~

演題: 「渦巻きは何を語る?」

作品: フリーデンスライヒ・フンデルトワッサー《(837)郷愁の紫色の屋根》1982年

日時: 11月11日(日) 午後2時~

演題: 「不親切な挿絵?!」

作品: デイヴィッド・ホックニー《6つのグリム童話のための挿絵》1969年
場所: 2F講堂(無料、定員180名、先着順)

休館日は月曜(祝日の場合は翌日)、10月1日(月)~10月12日(金)です。詳しくはHP <http://www.art-museum.city.nagoya.jp>をご覧ください(ナ)

展評

2012年1月20日(金)～7月22日(日)
フェルメール・センター銀座

「フェルメール光の王国展」

相変わらずのフェルメール人気です。展覧会のポスターやチラシのメイン・ヴィジュアルには必ずといっていいほどフェルメール作品が登場し、その静謐な神秘的な光で私たちに誘いかけています。この日本でのフェルメール人気。それほど昔からのものというわけではありません。たとえばこの夏、東京と神戸で紹介される《青いターバンの少女》。この作品が初めて日本にやってきたのは1984年のことですが、その時の西洋美術館での入場者数は15万人あまり。現在の人気ぶりから考えると意外なほどの数といえるでしょう。恐らく今のブームの出発点は、1995年から翌年にかけてワシントンとハーグで開かれた空前絶後の展覧会以後のことでしょう。21点のフェルメール作品を世界中から集めたこの展覧会は、まさに一つの事件でした。その上を行こうというのが銀座で開かれた「フェルメール光の王国展」。現存する37点(35点という説も)の真作を忠実な「複製」によって一堂で紹介するというものです。「複製」といってもサイズは原寸どおり、額縁までそっくりそのまま再現し、なおかつ制作当時の色彩やテクスチャーに肉

薄しようかという気合の入れようです。最新の科学技術を駆使すれば、本物に限りなく近づくことも不可能ではないはず。期待はいやがうえにも高まります。しかし、銀座6丁目のビル内に設けられた会場に一步足を踏み入れた瞬間、膨らんだ期待はしゅるしゅるとしぼんでいきます。作品?の前で幾度も自問してみます。自分は「複製」という先入観で目を曇らせていないか? 絵画を本物そっくり再現することなど、所詮できるはずがない、という偏見の色眼鏡をかけてはいないか? どれほど自問して、無心を心がけ眺めていても、最初の失望から立ち直ることはできません。とてもよくできている。でも決定的に何かが抜け落ちている。その何かが、作品を作品たらしめているのだ。その思いを反芻しながら会場を後にしました。(F)



会場風景

展評

2012年6月30日(土)～9月23日(日)
豊田市美術館

「カルペ・ディエム 花として今日を生きる」

展覧会タイトル「カルペ・ディエム」とは、ラテン語で「その日を摘め」という意味なのだそう。今日という日の花を摘め、つまり、今生きていることを大切にしようという言葉らしい。展覧会は、美の儚さをどのように表現してきたかということを通じて見ることから始まった。まさに今美しいこと、生の輝きに目を向けさせられると同時に、美の儚さを表すのに、昔から花と共にうら若き女性がモチーフとして使われて来ていることに気づく。子どもっぽい無垢さと、大人の女性へと発達しつつある初々しく澁刺とした女性らしさに美の儚さを見るロマンチズムはエロティシズムでもあると感じながら、生きるエネルギーの瞬間の輝きは確かに若さに象徴できるかもしれないと思う。そして、儚い美を象徴する「花」をテーマに制作された12名の現代作家の作品群。3.11後を生きる私たちは今まさに、死ぬ存在であるということ意識した上で生きていくことを考えることに直面しているのだ、ということがつきつけられる。中でも、荒木経惟が、震災後の復活のイメージを花と人形が織り成すアダムとイブの世界創造の抒情詩として提示した《墮落園》

の世界観には圧倒された。美しい花の背後の間は、死の恐怖、悲しみ、怒り、あきらめ…。人形たちに託された、俗な欲望にも見えるエロティシズムが希望に見えてくる。また、渡辺豪のチューリップが枯れていく様子をデジタルアニメーションにした《それになるためにそれを摘むこと》の洗練された静謐感に目を奪われた。伊島薫が作り上げた女優の死の場面の写真を見て、どのように死にたいかと考えた。私だったら、魂だけがふっと消えるように死体も残さず、死に目を見せない猫のように突然消えてしまいたい、自分も死ぬ存在であることを意識した。とはいえ、宮島達男の、死の瞬間を設定し残りの時間を意識することで自分の生を見つめようとする《Death Clock》に私は向き合えなかった。仮にとはいえ、死ぬ日を設定するというのが生理的にできなかったのだ。作家たちの真摯な「今」との取り組みが、私たちの「今」をえぐり出そうとするようにも感じられた。(hina)



伊島薫 (Sakai Maki wears Jil Sander) 2008年
ゼラチン・シルバー・プリント 作家蔵

展評

2012年4月3日(火)～4月22日(日)
いわき市立美術館

『光あれ! 河口龍夫 -3.11以後の世界から』

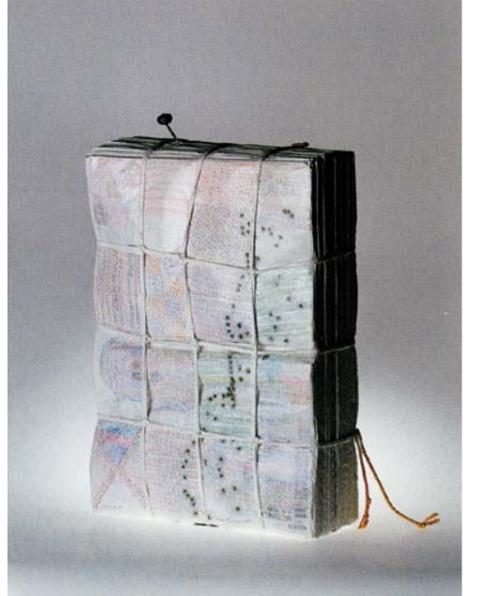
「3.11」以後、一時期さまざまな分野で、それぞれの存在意義が「自問」された。未曾有の災害に対しては、個人の存在はあまりにも小さく、さらに「表現」はあまりにも無力に映ったためであろう。ただ、「美術に何が出来るか?」という問いかけは、今日に至ってもなお決して無意味ではない。2007年、当館でその圧倒的な空間構成力を見せた河口龍夫(1940—)の展覧会が今春、福島県のいわき市で開催された。1986年のチェルノブイリの事故を受けて制作されてきた、鉛や種子、そしてひまわりを用いた河口の作品は、不幸にも今日われわれが直面する「現実」を象徴するものとなってしまった。今回の展覧会は、昨年3月の震災直後から展覧会直前の今年4月までの一年間に制作された作品によって構成されていた。

《鎮魂の3月》と題された作品では、「あの日」から4月10日までの一ヶ月間の新聞が束ねられ、梱包されている。被災の状況を示す「地図」を除いて、新聞の文字や情報は「下地」として半濁色に塗り込められ、その表面には震災によって犠牲となった人々と場所がマークされている。地図の上に打たれた無数の「点」は、数字以上に観る者の地理的理想像力を喚起させた。

また、アトリエ近くの九十九里海岸に打ち上げられ、収集された流木やプラスチックの容器による「オブジェ」作品も新たな意味を帯びつつあった。「オブジェ」とは、本来それ自

体の「場所」や「機能」から解放されたことに起源を持つ。それらの作品は、TVに映し出され、繰り返し放映された津波の、あの引き潮によって「生活」から切り離された「がれき」の映像を重ねながら、「3.11」以後、われわれには渚にまつわるかつての詩的想像さえもが許されなくなったことを暗示する。

だが、そうした作品における意味と象徴の変容以上に注目すべきは、この展覧会が正しく被災地にある美術館で開催されたということである。企画を提案した美術館とそれを受けた美術家、その両者には通常の場合とは異なる、それ以上の制約や逡巡、葛藤があったであろう。予算の削減とも相俟って、萎縮し続けるわが国の美術館活動にあって、この展覧会には現代美術の使命と美術館の存在意義をも見せられた気がしてならなかった。(J.T.)



河口龍夫《鎮魂の3月》2011年

CULTURE, MOVIE, DRAMA & MUSIC

映画「ファウスト」

アレクサンドル・ソクーロフ監督
名古屋シネマテーク

真っ暗な劇場から外に出た瞬間、眩暈を感じた。映画の世界から現実世界に戻ってきたのにまだ、どこか平衡感覚が失われたよう。私はどこにいるのだろう。大げさなようだけど、臨死体験から復活したみたい。映画館で見る映像の力の醍醐味。

舞台は19世紀のドイツの町。随所で感じるデジャブ感覚は、どこかで見知ったファウストの台詞の記憶からだ。台詞も、ゲーテのオリジナルから引用され、自由に翻案されているのだという。「ファウスト」の話はあまりに有名だから、実際に本を読破していない私でも何となく知っている。実在の錬金術師ファウスト博士の伝説を元に様々な作家が書いているが、ゲーテのものは戯曲だ。悪魔の誘惑、官能と無垢、墮落と救済、欲望、人間の業の様々な出来事がテーマとして登場する。

生きる意味を見出すことができないファウスト博士の倦怠感とはとても文学的で、映像の美しさとともに芸術的雰囲気に酔った。悪魔メフィストフェレスは、映画の中では高利貸マウリツィウスとなり、ところどころ人間の金銭欲が仄めかされている。ファウストは、マルガレーテに一目ぼれし、信じられないくらいあっさり意図せずして人を殺してしまう。しかも殺した男はマルガレーテの兄だった。倦怠の日常に突然次々起こるドラマは、

ファウストを興奮状態に目覚めさせ、衰れで無垢なマルガレーテのしぐさが思わせ振りで、欲望に溺れていく。重要なシーンの時が止められ、光や空間にゆがみをつけられ、見ているとまるで絵画空間の中に入りこんでしまったような感覚に陥る。現実と物語の世界を彷徨わされて、夢の中で夢の世界を本当だと感じているように、物語の中の空想の産物も実際の私の世界にも実際に存在しているように感じられてくる。

時々、私も生活に追われ、疲労感と倦怠感にまみれる日々を送っているのだと思ってしまうときがある。誰だってそんな時に悪魔が現れれば、ここから脱却しようと簡単に魂を売りたくってしまう。ソクーロフが現在の悪魔の誘惑として登場させたように、お金にまつわる誘惑など、私たちの日常の中にも欲望を刺激するたくさんの悪魔がうようよしている。身近で普遍的なテーマだからこそ、現実と非現実がない交ぜになっていく演出に自分自身も入り込んでいくような感覚に陥って、映画の世界をどっぷりと堪能した。(hina)



©2011 Proline-Film, Stiftung für Film-und Medienförderung, St. Petersburg, Filmförderung, Russland Alle Rechte sind geschützt

BOOK

『ムーミン画集 ふたつの家族』

トーヴェ・ヤンソン著、富原真弓訳

「ムーミン」というと、即座にアニメのムーミンを思い出す世代である。小さい頃に見ていたテレビの中のムーミンやノンノン、ころころと太っていて、なんだかのんびりしていて、かわいらしかった。しかし、原作者トーヴェ・ヤンソン描くところのムーミンは、少し趣が違う。

この本には、トーヴェ・ヤンソンの描いた「ムーミンの本当の世界」があるようだ。北欧の深い森の中は、鬱蒼として薄暗い。ムーミン谷の住人たちは、森の中で様々な冒険をしたり、皆で集まってわいわいと過ごしたりしているのだが、そこには、アニメの「ムーミン」のような、からっとした明るさはない。唯一アニメの中で少しニヒルな雰囲気を漂わせていたのはスナフキンだが、彼のもつ雰囲気こそが、ムーミンの物語全体の、本来のものなのかもしれない。

この本の中には、初期の頃のムーミンも登場する。初期のムーミンは鼻面が長く、別の生き物のようで面白い。味わい深いムーミン

である。この本を通じて、トーヴェ・ヤンソンの想像力がどんな風にムーミンを変化させていったのかも知ることができる。

彼女の絵は、「ムーミン」の物語の挿絵ではあるが、物語の説明という領域を遥かに越えて、ひとつの独創的な世界を作りだしている。物語を知らなくても、充分に楽しむことのできる絵である。私たちは、絵によって、ムーミン谷の鬱蒼とした暗さや、登場する生き物たちのざわめきや、冒険のスリルを感じることができる。

子供の頃には、アニメのかわいいムーミンを楽しんだが、これは、大人が楽しめるムーミンの世界である。というより、大人だからこそ楽しめる、ムーミンの世界なのではないだろうか。

ちなみに、本のタイトルの「ふたつの家族」とは、ムーミン一家とトーヴェ・ヤンソンの家族のことであり、作者のプライベートにも迫っている。(akko)



【編集後記】

この号が皆さんのお手元に届く頃には残暑厳しい季節でしょうか? 想像しただけでも体力を奪われるような心地がします。先日、私用に松本へ行く機会があり、翌日は長野まで足を延ばして初めて国宝・善光寺を訪れました。現地に住む友人が案内してくれたのですが、印象に残ったのはお戒壇巡りです。本堂の瑠璃壇床下の回廊の壁を手で伝いながら巡り、中程に懸かる「極楽の錠前」に触れることで、錠前の真上におられる秘仏の御本尊様と結縁を果たし、往生の際にお迎えに来ていただけるという約束をいただくというもの。先を行く友人の声を頼りに慎重に歩を進めたのですが、回廊の幅も天井も道筋も、何もかも分からない本当の真っ暗闇に不安と恐怖を覚えました。バチが当たるとは思いませんが、「極楽の錠前」に触れるより、進む方向の先に微かな光を見つけたときの方がどれほどありがたいかと思ったり。光のある喜びを実感した貴重な体験でした。(3)

アートバーバー第90号 発行日: 2012年8月1日

発行 名古屋市美術館
[芸術と科学の社・白川公園内]
http://www.art-museum.city.nagoya.jp/
〒460-0008
名古屋市中区栄二丁目17番25号
地下鉄(伏見駅・大須観音駅・矢場町駅)下車
Tel.052-212-0001 Fax.052-212-0005
休館日: 毎週月曜(祝日の場合は直後の平日)
開館時間: 午前9時30分～午後5時
祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は閉館の30分前まで

Nagoya City Art Museum